守護神ゴーレス

第14話
アワ ～光輪の門～
HEART OF SUNRISE

作：みかつきなお

絵：ぜんざいナオミ

守護神ゴーレス　第１４話
アワ～光輪の門～
Heart of sunrise

二見ヶ浦

イセ……、伊勢の国。あの心象風景の海。

みずきは名古屋ではなく伊勢市の飛行船発着場に降ろすように重工職員に提案した。

「わかりました。要望通り今夜は伊勢市の桐丸重工流通センターで停泊させて宿をとりましょう。名古屋より向こうはまだ目的地がはっきりしませんし。体勢を整えるということで」

港の飛行船発着場を降りた一行は海岸の近くの宿に泊まった。

いつも百名の工場で雑魚寝に近い状態になる3人なので、舜、裕一とみずきは一緒の和室になった。でも男性陣は気をつかってみずきと距離を開けた。

そんな二人の気遣いをまったく考えずにみずきはまだ地図を見ている。

「早朝、二見ヶ浦に行く。日の出に間に合えばいいから5時半に出発」

「やはり早く気になる場所を見たいんだな」

「そう、日の出しかない」

早朝の空気の中、寝不足が吹き飛ぶ寒さが沖縄の人間には感じられた。

「あー、ひーさんやー（さむいよー）」

裕一は震えていた。舜は用心して着込み過ぎだった。鹿児島出身のみずきはそんなに気にしていなかった、みずきは念願の場所に来たことで非常に興奮していた。

車のクーラーは使っても暖房はあまり沖縄人は使わない。車修理屋の彼もあまり使ったことのない暖房をフルで掛けた。

夜明け前の二見ヶ浦の海岸は波の音だけが聞こえていた。そして水平線が白み始めた。

心象風景

「この海は」

「いつか見たことのある」

「そう、イメの渚。皆の心にある風景」

三人は薄く瞳をとじて、心の中のイメの渚を思い

浮かべた。異界とのゲートとなる心の場所。
人それぞれにある心の扉の場所、いくつも扉を皆が持っている。
3人が共通して持っている扉の一つ。
舜は『賢者の石海岸』と名づけていた場所。
「賢者の石海岸の回りには今のような遊歩道はない。この風景は古代の風景なんだ」
彼等3人の目の中のあるのは現実と心象風景が重なりあった風景であった。それが現実の時間とともにまもなく訪れる日の出に向かって光を強くしていく。
「光、光の輪が見える」
二見ヶ浦の海中の二つの岩に重なる円形の物体が見えてきた。
光の輪は推定直径10m。
「半物質。しかし消えそうなほど薄い。どうするみんな」
舜は2人を見た。
「舜、やはりこの消えかけた神様を復元してみたくなったぜ」
「消えかけているのではないわ。千年以上無理に使われて弱っている。エネルギーを与えることを誰も行ってこなかった。力を与えられるのはスバルの巫女の血筋。……私にこう言わせる神官、ここにいた。ここが彼女の場所だった。スバルの母の場所だった」
みずきは頭を抱えて座り込んだ。頭に入る情報量の多さにそれを整理できなくなった。舜は彼女の頭に手を添えた。
「スバルの母のものならばなおさらこれを元に戻してあげなければいけない。神に魂を与えなければ」
「魂？　みずき、龍の眼を見てみろ！」
裕一に言われてみずきはポシェットから龍の眼を取り出した。
「すごい、中に光の輪が出来ているな」
今まで何度も発光現象を繰り返してきた龍の眼であるが、ここにきて今までで最高の輝きを見せている。
「みずき、やはり龍の眼が示していたここは龍の眼が帰りたい場所だったのか」
日が昇ってきた。水平線上に上がった太陽は島影を照らしながら上って行く、それらの風景は光の輪の中で行われる光景だ。
「日の出と島。これはあの百名ビーチ、ヤハラツカ

サの浜で行われている光景と同じじゃないか。聖地の風景だ。」

「ゴーレスの体を作った時のように、朝日の中ならあの光の輪を現世に作れるかもしれない」

「……たぶんそれを光の輪はそれを望んでいる」

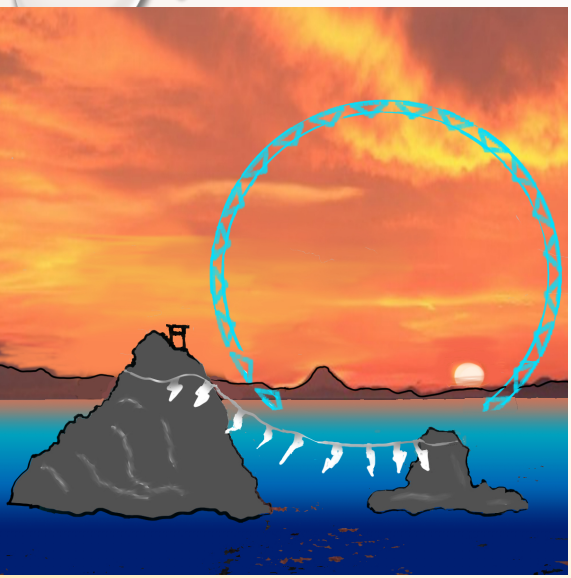
舜は太陽に右手を向けて形のイメージを行った。

「光の輪、よみがえれ。その名前は……」

＜アワ＞

三人の頭に同時に浮かんだ言葉。

確信がこの名前を呼ばせた。



妹の力

兼光の船団はエージェントからの情報をつかんで長野の諏訪へと船を進めた。

画面上の桐江は徹夜明けのやつれた表情だった。

「さて諏訪生化学工業に対する攻撃の準備は整った」

「まったく、最初にこんな大仕事になるなんて言ってください」

「『社長は優雅に旅行』の情報を流すためには、味方からだまさなければ」

「では社長の御武運を祈ります」

「君の手腕をみせてもらおう。ではまた後で」

飛行船の昇降ゴンドラが小夜子たちが軟禁されているログハウス前に下りてきた。

銃を構えた黒いコートの軍服の男たち6名が入り口に対面で3人ずつ並び、黒いコートにタイトスカートの女性隊員がログハウスの中に入っていった。

20分後女性隊員とともに巫女姿の小夜子と龍希がでてきた。

「巫女のコスプレなんてさせて、何をさせるの？」

「私は神事の度に神女の格好してますから」
小夜子の目には龍希は神々しくみえた
袴姿に着せ替えられた2人は隊員の誘導とともにゴンドラに乗り、乗降ハッチを開放した時、軍服の渚岐と少女の姿を見た。
「ようこそ、神宮特別神事旅団・神祇攻撃隊長の渚岐水都（なぎさきみなと）大佐と副長渚岐ミトヨである。これから神事を行う。諏訪湖に向かう」
「あ、そう。私達に何をさせるの？」
「それは神を呼んでからだ」
「それはいいけど私はいわゆる『能力』をもってないんですけど。スプーンも曲げられません。予知夢も見えません。あのゴーレスのチームを呼ぶためだけの役目なんですか？」
「小夜子さん、あなたは力に気がついていないだけ。あなたは力を発揮していないが、少なくとも『妹の力』を持っている」
「兄に対して働くという力ね」
「能力者の妹だけあって、兄以上の力が隠されている」
小夜子は少し首をかしげた。
「ちょっと待って、一体いつ調べたの？　私達の情報を」
「ネット上から調べられるものは橘のチームでできるさ。個人的なメールから全て。そして私達にしかできないことはイメの渚より向こうの記録をしらべること。君達の心はセキュリティをかけないで話し合っているようなものだ。
器神（つほとがみ）である岐（ちまた）の神を使えば心の断片を見つけることができる。
橘社長から依頼があってからいろいろ調べたよ。おかげで僕は君より兄のことを知っているかもしれない」
軽く微笑んだはずだが小夜子にはいやらしい顔に見えた。
「あんた、なんか虫が好かないんだよね」
窓を眺めていたミトヨが外に指をさした。
「お兄さま、もうすぐ諏訪湖です」
「ああ、早速儀式を始めよう」
諏訪湖の中央部に飛行船は到着した。昇降ゴンドラを降りた渚岐らは氷の張った湖面に立った。
曇り空が白み始めた。日の出の時間。水都は湖面に矛を打ち込んだ。
「伊是名龍希さん。神降ろしの歌を歌ってほしい」

「いやです。神様は強制する人を喜ばないはずです」
　ミトヨが龍希の額に人差し指をあてると龍希は黙って眼を瞑った。水都は矛を持ちながら天を指差して言った。
「日本の地脈のホットスポット『龍穴』を守護する巫女の血脈。君達がいなければ成り立たない。君達はいるだけでいい。沖縄で採取したウォードの集合体から君達の心へのリンクを解放する。ここから沖縄までエネルギーを直結させるのだよ。
　全ての日本人の意思を全て一つにまとめるのだ。そのためにはこの龍穴の守護神タケミナカタを呼び起こすしかないのだ。地神よ。目覚めよ！」

御神渡り

　その時眼をつぶった龍希の口から声が放たれた。風のようであった。嵐の空を流れる風の音のような声。
「龍希ちゃん！」かがみこんで動かなくなった龍希はそのまま神歌を発しつづけた。
　龍希の神歌と同じ風のような歌声が湖一帯からこだまのようにあちこちから反響して響き、その歌声が回転して回っていったのだ。
　矛を持った渚岐らを中心に３０ｍほど離れた湖面にバリバリとひびがはいってきた。
「ちょっと、ひびが入ってきたじゃない！」
　ひびは矛を中心に円形を形作り、氷の柱がひびの間からせり出し、４０㎝ほどの大小の氷柱が林立する姿に変わっていった。
「これがもしかして……」
「そう、御神渡り（おみわたり）。神の道を作ったのだ。この湖底に眠るタケミナカタの神を呼び起こし、我が守護神とする」
「なぜそうするの。わけがわからない」
「君達がゴーレスを作ったことと同じ事をするためだ」
「私達は迷惑をかけていないのに」
「日本を守る方法を探しているのだ。強敵に対峙するためには必要なことがある」
「それを日本中にはっきりいってよ！」

つづく